

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 27 日現在

機関番号：37125

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24593277

研究課題名(和文)複合的人道危機から逃れた難民を受け入れたことによって生じたケニア女性の健康問題

研究課題名(英文)Study about Host Community's health problems in East Africa

研究代表者

秦野 環 (HATANO, TAMAKI)

聖マリア学院大学・看護学部・准教授

研究者番号：00352352

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：難民を受け入れることにより負担が増大するホストコミュニティの健康状況を調査することを目的に東アフリカウガンダ共和国難民定住地で調査を行った。

難民定住地内の長期滞在者は、同じ出身国である南スーダンからの新規難民流入によりウガンダ政府から貸与されている土地を奪われること、水などの天然資源を分かち合わねばならぬこと、新規流入者が敵対勢力であることなどを起因とする小競り合いが増えたことなどから存在を脅かされていることが健康負担となっていることが面接結果から判明した。

研究成果の概要(英文)：Countries and areas where accept refugees are always faces difficulties since the host communities also have to share the limited land, natural resources and sometimes security becomes problems. This research aimed to study about host community's health in one of African countries. The target country was Republic of Uganda. It is quite well known as refugee friendly country in East Africa. Moreover, recently it receives quite big number of refugees from South Sudan. While this study period, the researcher visited the research area twice and met 30 refugee women.

Based on the interviews, findings are :refugees who have been staying at the settlement for long period felt threat since new comers came in and the land was cut, facing difficulties to share natural resources, like water and security problems were risen. Those situation made long term refugee have anxiety. Moreover, the interviewee showed their disappointment for health care in the settlement.

研究分野：国際看護

キーワード：難民 ホストコミュニティ

## 1. 研究開始当初の背景

(1)「アフリカの角」とよばれる東アフリカ地域は、頻繁に干ばつに見舞われ人々の生命が危機にさらされることが多い。そのひとつの国であるソマリアは1991年以降無政府状態が続き、2012年に新連邦議会が成立したものの長きにわたって政治情勢の不安定な状態が続いていた。情勢の不安に加えての自然災害により、多くの難民が近隣諸国に逃れ、2011年6月以降、約94万人ものソマリア国民が近隣諸国に難民として流出している状態であった。隣国のケニアには1991年にソマリア政府崩壊後逃れてくる難民のためにキャンプが設営されてはいるが、長い無政府状態の結果、当初の計画以上の多くの人々が流入し過剰な混雑状態が続いている。難民キャンプに滞在する難民は国連機関である国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の支援を受けることとなるが、受け入れ地であるホストコミュニティは、同じ干ばつにさらされている状態であっても多くの場合支援を受けることは少ない。よって、同じ干ばつ状態にありながら多くの難民を受け入れているホストコミュニティの負担、それによる健康状態を調査すべく研究を計画した。しかし、研究計画の応募とほぼ時を同じくしてケニア内での武装勢力によるテロ行為などを受けケニアがソマリアに派兵するなどケニア国内、また特に東部における治安状況が不安定な状況が続き、当初の予定通りにケニア国内での研究を始めることが困難となった。

(2) 当初の研究対象地域での研究が困

難と判断し、近似の状況にある国での研究を行うべく調整し、平成26年度（2014年）からウガンダ共和国での研究を行うこととした。ウガンダ共和国はアフリカの中でもその難民受け入れ政策に対し非常に寛容と言われ多くの難民を受け入れている。特に2013年12月に発生した南スーダンの危機以降は多くの難民がウガンダに流入している事実がある。よって、大量の難民を受け入れるホストコミュニティの健康状況を調査するには適切なのではないかと判断した。

## 2. 研究の目的

難民を受け入れているホストコミュニティの健康状態を調査する。加えて難民キャンプにおける人口増加により増加すると考えられている女性を対象とした暴力の実態を調査し、予防策を検討する。

## 3. 研究の方法

- (1) ウガンダ共和国内難民キャンプとその周辺（ホストコミュニティ）の住民に面接調査を行い、健康状態と、キャンプ内で発生する暴力の実態を把握する。
- (2) 面接調査実施のため、アクセス可能な難民キャンプ地を抽出する。
- (3) ウガンダ共和国総理府難民局から、難民定住地訪問許可を取得する。
- (4) 調査地域訪問は、平成2015年2月25日から3月9日まで、平成2016年1月26日から2月6

日までの2回である。調査対象国の中で調査地である難民定住地 (KIRYANDONGO REFUGEE SETTLEMENT)の訪問は、それぞれ5日間(平成2015年2~3月)、4日間(平成2016年1月)に実施した。

- (5) 面接対象者の合計は、2年間で30名とした。

#### 4. 研究成果

- (1) KIRYANDONGO REFUGEE SETTLEMENTの状況

KIRYANDONGO REFUGEE SETTLEMENTは、ウガンダ共和国北西部に位置し、ウガンダ国内避難民他、ケニア、コンゴ、ブルンジ、ルワンダ、スーダン、南スーダンからの難民を受け入れている。最大受け入れ人数は、約50,000人と言われている。2013年12月の南スーダンの危機発生前は、約3,000人の国内避難民や長期滞在難民が暮らす定住地であったが、それ以降、日々大勢の難民が流入し2016年1月訪問時には48,000人を超える難民と国内避難民が滞在していた。

- (2) 面接の実際。

2015年(平成26年度)の訪問では、難民を受け入れているホストコミュニティの健康状態を調査する目的で面接を行った。ウガンダ政府総理府難民局から紹介された現地事務

所、難民代表者と協議し、難民定住地に長く滞在し、かつウガンダ国民をホストコミュニティとすることとした。ウガンダ国民5名を含む15名に面接を行った。

2016年(平成27年度)の訪問では、前回の面接から得られた結果をもとに、2013年12月の南スーダンの危機以前からの滞在者を中心に15名を対象に面接を行った。

2015年・2016年ともに、ウガンダ政府総理府難民局現地事務所から紹介された難民代表者に面接対象者の選抜を依頼したため、対象者のサンプリングはコンビニエントサンプリングであることは否めない。使用した言語は、研究者と難民代表者の間を英語で、難民代表者と面接対象者の間をスワヒリ語、もしくはアチョリ語、難民代表者が理解できない言語に関しては、面接対象者の家人他、地域の住人が訳を務めた。個々の面接は対象者の了解を得てすべて録音した。帰国後、逐語録を作成し内容の分析を行っている。

- (3) 結果(分析中)

2015年訪問でホストコミュニティ(ウガンダ国民)5名、難民5名(新規流入3名、長期滞在者3名)、難民の中でも

特に支援を必要とする人 5 名の計 15 名、2016 年訪問で長期滞在者 15 名の計 30 名に対し面接を行った。2015 年に面接した新規流入者 3 名を除く 27 名は、一様に新規流入者による難民定住地における土地の問題、水他の天然資源の問題、治安の問題を挙げた。

健康問題に関しては、身体に何らかの痛みを抱えるものが多かったが、定住地内診療所では十分な対応が受けられないとの意見が多かった。多くの場合、鎮痛剤のみの処方となり、経済的余裕のあるものはプライベートの診療所を訪ねる。しかし、支払い能力のないものは「その状態」を受け入れるしかないとの意見が多かった。2015 年訪問中にも脾臓の腫瘍で大量の腹水貯留が見られる患者が病院に送られることなく定住地内での突然死をおこした。しかし、子宮頸がんを患ったものや HIV に感染しているものは定住地内診療所だけでなく、ウガンダの郡病院での治療を定期的に受けられるなど、差異が見られた。

水他、天然資源に関して。2013 年 12 月の南スーダンの危機的状況発生前は 3,000 人余りの滞在者であったために、特に大きな問題ではなかったが、定住地内への大量の難民の流入、加え

て、定住地周辺における人口増加に伴い、難民定住地に水を供給していた水源地から難民定住地以外へ水を供給することとなったために、定住地内の水量が激減したとの意見が多かった。また、新規流入難民の多くは南スーダンの「ヌエル族」が多く、長期滞在者に多いアチヨリ族の敵対勢力でもあったために水場などでの小競り合いが多く、治安に対して不安を抱くものが多かった。2016 年訪問時には、難民定住地内における UNHCR や NGO の活動を受けて難民の中に共存の意識が定着しつつあり、面接者 15 人中、治安に対する不安を訴えたものは 9 人であった。

女性に対する暴力。面接者 30 人中、本人、もしくは家族内に女性に対する暴力を経験したものは 3 名いた。うち二人は性的暴行を受け妊娠し出産している。難民定住地内で活動する NGO が治安、ほか暴力、女性に対する暴力に関し啓発活動を行っているが撲滅には至っていない。

#### (4) 考察（現在、進めている）

健康に関し、面接者の多くは身体的な痛みを訴えた。なかでも胸の痛みを訴えるものも多く、ただ臨床医学的な診断を受けたわけでもなく、また特に悪化しているわけでもない状況が

多かった。あとは、過重労働、特に水汲みや自分の小屋から遠く離れての燃料の収集による身体的負担の現れかと考えられる。

健康問題を抱える難民の中で、支援を要する人々（PNS, Person with special needs）に認定されたものは、特別な支援を受けていた。これは難民の中で認定する役割を担うものがおり2016年度の訪問では、このシステムが公平性を保っていないと訴える難民もいた。女性に対する身体的・性的暴力に関しては、NGOを通じて訴えるシステムが存在するようであったが、被害者に対する特別な支援は存在していない様子であった。

2015年訪問時と、2016年訪問時では、長期滞在者の自己の存在に対する危機感は減少したのか、2015年訪問時に比べて、危機や不安を訴えるものが少なかった。これは、2013年12月の南スーダンの危機直後の大量の新規難民流入が落ち着いてきていること、2014年から2015年にかけての急激な流入が減少してきたこと、定住地内NGOの活動により共存を理解し身に着けた難民が増えてきたことが考えられる。

(5) 主な発表論文等  
研究開始が遅れたことと、長時

間の面接の逐語録を作成すること、内容の分析を行うための内容の抽出などに時間を要し、現在も研究を進めている。今後、研究論文としてまとめ、学会発表、学会への投稿を行いたいと考えている。

(6) 研究組織

研究代表者 秦野環、  
研究分担者 文珠紀久野、宮林郁子  
氏名及び所属研究機関名・部局・職名  
秦野 環 (HATANO TAMAKI)  
聖マリア学院大学 看護学部 准教授  
文珠 紀久野 (MONJU KIKUNO)  
山梨県立大学 看護学部 教授  
宮林 郁子 (MIYABAYASHI IKUKO)  
福岡大学 医学部 教授  
研究者番号  
秦野 環 00352353  
文珠 紀久野 70191070  
宮林 郁子 40294334